Nara Women's University

大和の造型

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 奈良女子大学文学部附属中学校・高等学校 公開日: 2010-11-10 キーワード (Ja): 造型, 大和 キーワード (En): 作成者: 吉沢, 榮敏 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10935/2350

大　和　の　造　型

吉　沢　栄　敏

倭は　国のまほろば　たゝなづく　青垣
山ごもれる　やまとし　うるはし　　（倭建命）

（一）

この大和の美しさは、たゞにその風光の美しさのみでなく、そこに生まれ生きた人々の遺した造型にも我々は見ることが出来る。こゝで自分は、この奈良で出土した、縄文時代の土偶や、その後の埴輪などについて、考えてみようと思う。

この奈良県出土の土偶や埴輪は、まさに、日本的造型の源泉であり、そこに示された美的感覚はその本流をなすものであると自分は信じるが、これらは、今まで、日本美術史を考える上にとり上げられること少なく、その量によって、東日本の土偶や埴輪が恰も、日本上古の造型感覚の本流であるかの如き評価がなされて来たことは、この奈良県出土の土偶や埴輪の美しさを知る自分には、義憤すら感じさせるものであった。

こゝに、それらのいくつかを紹介し、その正当な評価が与えられることを希うものであるが、そのことは同時に、日本美術の伝統と創造という大きな問題にも迫るものである。

現代美術の世界的傾向は、あのヘレニズムを想わせるが、ヘレニズムは物質文化を向上しこそすれ、芸術文化にとってはまさに臨終にも等しい。芸術が普遍性、世界性をもって歴史に残っているのは、その民族性に徹した姿に於いてであることは、ギリシャを見、エジプトを見れば判る。バッハはあくまでドイツ的であり、ヴィヴァルディはあくまでイタリア的である。亦、この民族性が不変性をもつものであることも、アルタミラとピカソを見、ラスコーとマチスを見れば明らかである。前者の逞しく獰猛な血は一万年を隔てて、ピカソに流れ、後者の華やかでリリカルな感覚はマチスに引継がれている。

近時、日本に於ける非日本的傾向は、歴史上、いくたびか経験して来たことではあるが己れ自身を見失ってはいないだろうか。

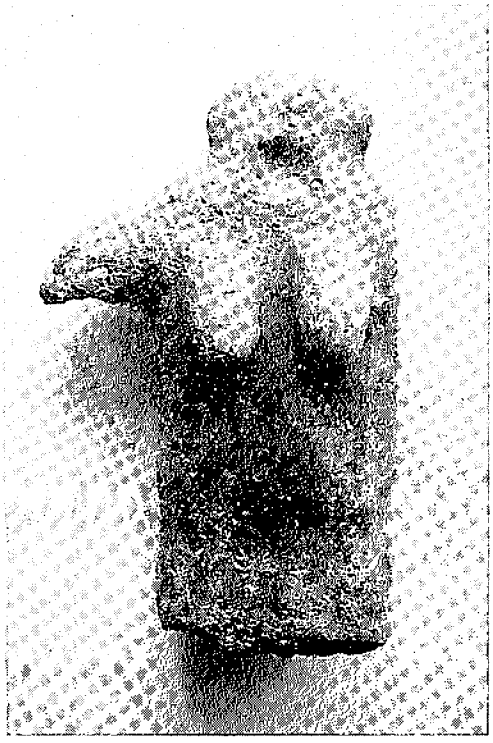
己れをふりかえって見るとき、それが単なる国粋主義に陥ったり、又、元禄期の如く、鎖国的雰囲気の中で醸し出される女性的なものに終らず、この動乱の渦中で、真に古代大和的な、或は光悦的なものを再認識する所から発することが必要と思われる。

（二）

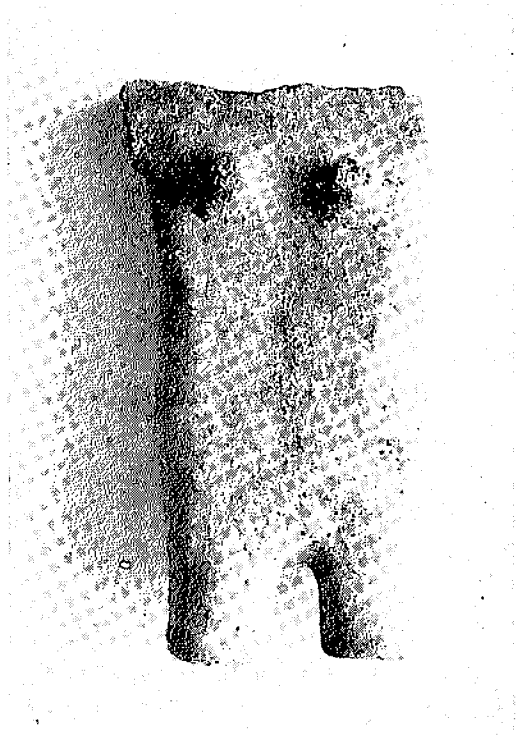
こゝにとり上げる奈良県出土の土偶とは、紀元二千六百年記念として大和三山の一、畝傍山の東麓に位置する橿原神宮外苑の整備拡張工事に併行して行われた調査（橿原考古学研究所長・末永雅雄氏のもとに昭和１３年から同１６年の間に行われたもの）により発掘された縄文時代晩期に属するものである。

山形県最上郡釜淵遺跡出土

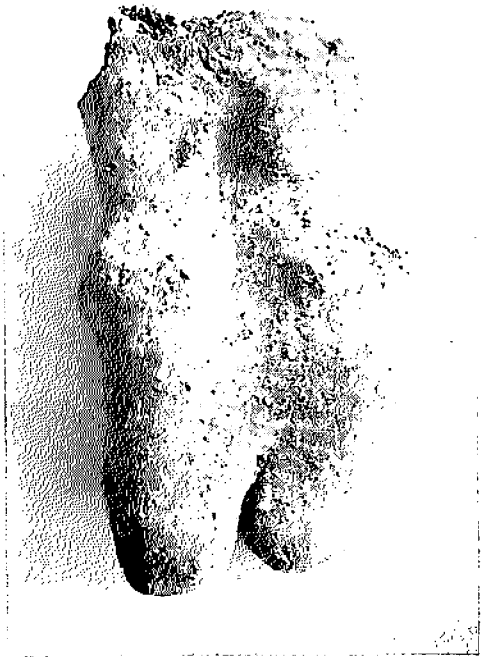
椹原土偶　1.



2.



3.



4.　　5.

その出土は約100点にのぼり、トルソとして見られるもの20点余を数える。大きさは、高さ略10cm前後で、全高20cm位と思われるものは2，3点である。その形は類型的でなく、個性をもったものであり、造りは中空のもの僅か2点、他はすべて中実（所謂ムク）のものであるが、珍らしい特徴を示すものに、喉部から股間へ貫通する消化管を表わしたと思われる孔があいたものが2点ある。他に、この孔が喉部に1.5cm位の深さにあけられたもの1点、胸部から下腹部へかけて細い溝状に ── 所謂ライフ・ラインと思われるものを表わしたもの1点が知られる。その焼上がりの肌合いは、伴出した土器と同様、石英砂粒などを含み、亀ヶ岡式土器・土偶などに見られる、すり磨いた油っこいものとちがい、さわやかな温かいもので、古信楽焼に通じた味わいをもつ。

これら橿原土偶に見られる感覚は、まさに、「明き、直き心」を表わした、すがすがしく明快なものである。

その感覚は、東日本出土の土偶がもつ複雑怪奇な、濃厚なそれとは異質のものである。それは、あの伊勢神宮の白木の柱に、或は、茶室や桂離宮に見られる明るく簡潔で清浄なものであり、東北土偶に見られるものは、中尊寺金色堂に、或は日光東照宮に見られる、いやらしいまでの繁縟さである。

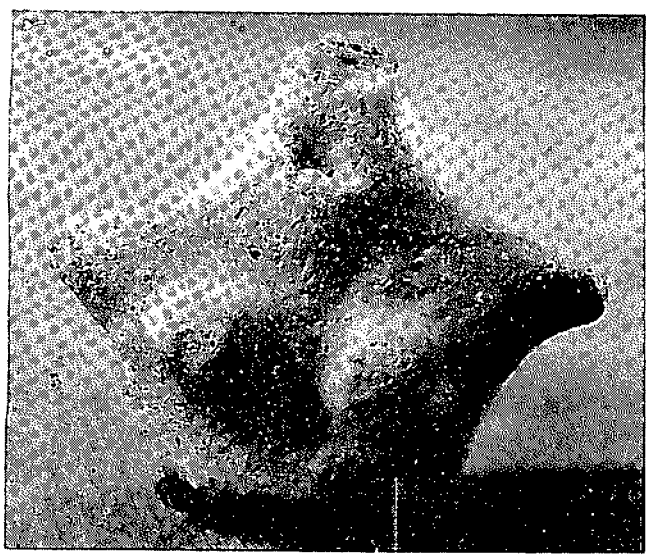
この東北日本縄文的な感覚は、殷周に代表される中国的なものに近い。殷周銅器と我銅鐸との相異は、漢字に対する、ひらかなのちがい、中国絵画に対する大和絵のちがいである。同じ東洋に於ける中国と日本とのちがいは、焼物や料理などに対する好みを見ても明らかであるが、仏教伝来後一時潜在した日本的感覚が白鳳・天平に至って顕現したものを見てもうなづけよう。たゞこの日本的な感覚が仏像に於て定朝がなしたように平明な定型化したものとなったのは、時代の鎖国的な女性的な性格の責任かも知れぬ。

所で、この東西日本の文化的フォッサマグナは、方言・民俗などにも見られるというが、すでに旧石器の製作に、瀬戸内技法と石刃技法との文化圏の対立があったという。この東日本の感覚が、日本美術の本流になるとは自分は考えない。考えるものがあるとすれば、それは、東京遷都によって来る幻想である。後述のように、埴輪を東日本が受け入れた時のような、或は大和絵的なものが浮世絵的なものになった時のような、ひ弱な、病的なものは、この橿原土偶には見られない。

一点興味ある土偶の破片が橿原から出た。それは、明らかに亀ヶ岡式土偶を模したと思われる肩腕部である。復原像高約22cm位のものゝ一部であるが、そこに表わされた模様は土器と同様、実に淡白なものである。橿原人が当時、進んだ(？)東日本の土器や土偶を手にしている様を想うのは愉快である。しかし彼らは、後の東日本人が埴輪を作った時の姿勢とちがって、自分の造型を平然と堂々と造って行った。

（三）

この橿原土偶に見られる単純、明快な感覚は、西日本から出土する土偶に共通したものである。そのいくつかを例に上げるが、そこに共通して見られる感覚は大和的なもので、この造型感覚が後の埴輪を生むことは後述するとうりである。



(1)

(1) 東大阪市箱殿町鬼塚出土の胸像

これは、図に見られるとうり一部欠けているが、頭部も単に山型に盛上げ、喉部に消化管の一部と思われる凹みをつけている。腕は恐らくこのまゝのもので、胸部も強い形を示している。腹部以下を失っているのは惜しまれるが、橿原土偶のそれに近いものであったろう。この土偶は実にアカぬけのした感覚をもち、肌合いも橿原土偶に似ている。

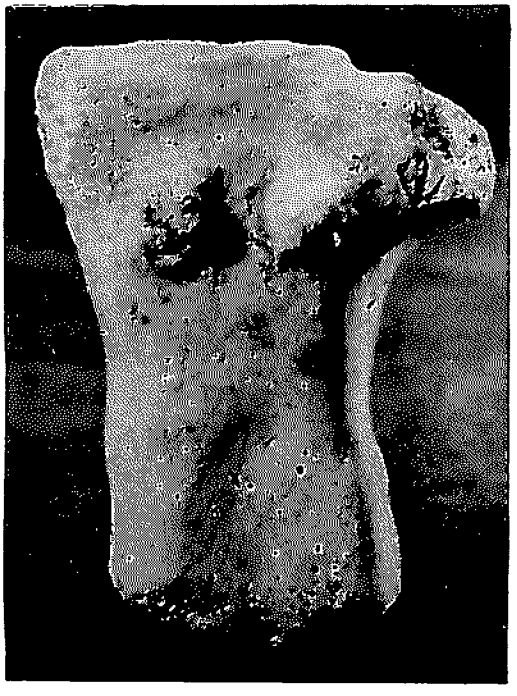
同じ東大阪市横小路町馬場川から腹部以下のものが出土しているが、誠に強靭な構成力を示している。

(2) 愛知県一宮市馬見塚出土の胴部

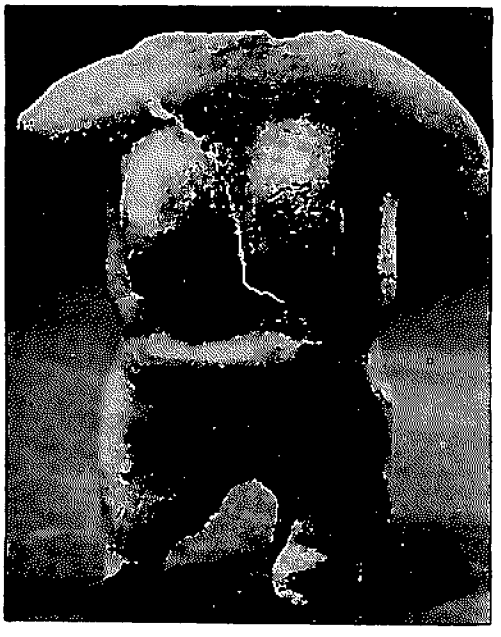
出土時、多少洗いすぎた感じはあるが、この白く輝くような肌合いは、後世この地の近くで焼かれた、正に日本的な焼物「志野」を思わせるものである。

頭部四肢を欠くが、恐らく橿原土偶のそれに近いものであろう。

この馬見塚出土のもの、同じ愛知県で知多郡南知多町天神山から出土した早期の土偶も同様のすっきりした感覚と構成力を示している。



(2)



(3)

(3) 宮崎県西臼杵郡高千穂町陣内出土

頭部を欠くのは惜しいが、全体にカッチリと焼上がり、近畿一円のものに比べると野趣があるが、同系の造型感覚をもつものである。

九州からは、他に熊本、大分などから多くの出土を見るが、それらも、大和的な感覚の地方的な表われと見られるものである。

その他、岡山県倉敷市福田貝塚出土の胸像、同県笠岡市大島津雲貝塚出土の顔など興味あるものである。広島、香川からも出土している。

この西日本出土の土偶に共通する椶原土偶的な単純明快な造型感覚は、東北日本出土のそれと明らかに異質のものである。それは何によって来たか。自分は民族的な違いを考えている。

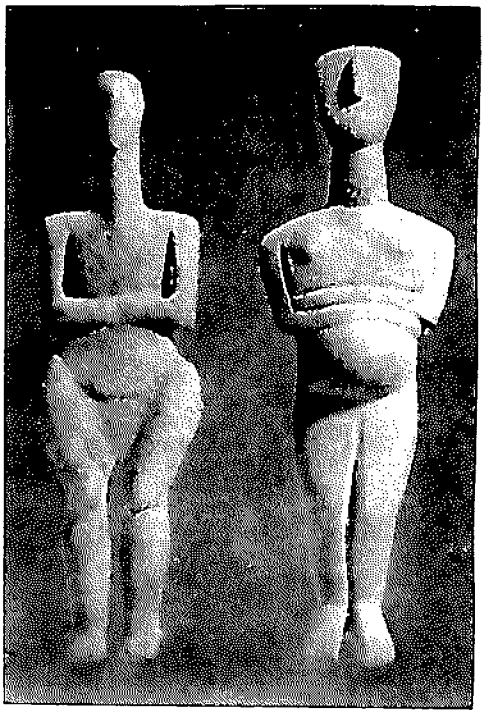
土偶の怪奇さを云うとき、人は非情な自然との斗い、或は祈りから来るというが、当時東日本は現在より温暖であり、又、山内清男氏の所謂「鮭鱒論」によれば、西日本より生活は安定していたと思われる。

西日本縄文人は、自然を非情なもの、対峙するものとして見なかった。そこには、古神道の生まれる必然性があった。

（四）

この椶原土偶のもつ日本的な感覚は、フランスのドルドーニュ・ローセル出土の「角杯をもつ女」のレリーフと比較した時、明瞭である。このレリーフはまさに西洋的な人間くさい写実的造型感覚の源泉である。人体のその客観的な、対物的な見方、肉体の謳歌と現世的な人間中心的な世界観が

ローセル・レリーフ



キクラデス・イドール

そこにある。橿原土偶はあくまで自然と融和する人間像であり、主客融合の情的把握がそこにある。この両者のちがいは、その後の美術史の流れから見ても明らかである。

たゞ、ヨーロッパの数ある偶像の中で、特異な性格をもつものは、キクラデスの石偶(イドール)とクレタ島・クノッソス宮殿中庭の新石器時代層出土のテラコッタ像である。

多くの「ヴィナス」は、フランスのレスピューグ出土の所謂リドーのヴィナスの洗練された感覚、オーストリアのヴィレンドルフ出土のものの野暮な感じ、チェコのヴィエストニツェ出土の油っこい野性味、イタリアの構築的な感覚といった民族的なちがいはあっても、いずれも、実に人間くさい、肉塊的な雰囲気をもつが、この、キクラデスやクレタ島のものは、即物的というよりは象徴的であり、清澄な明るさをもっている。その感覚に橿原土偶との共通性が見られるのは興味深い。

自分はこの橿原土偶のもつ、又日本美術のもつ特性の中に、このキクラデスに発するギリシア、イタリア的なラテン的性格を見るものである。

ギリシア・アルカイックの彫刻が、この橿原土偶に通じる感覚を示し、パルテノンの端正な美しさが、伊勢神宮の清澄な美しさに通じること、又絵画に於ても、ギリシア美術の曙、幾何学様式時代のディピュロンの人物が、我銅鐸に描かれた人物に似ていることを上げてもよかろうし、――これが単に原始的であるから共通するといったものでないことは、アフリカ、オセニアなど他の原始絵画の例を見れば判る――、イタリア・ルネッサンスのフラ・アンジェリコ、ピエロ・デラ・フランチェスカ、等々などが日本的な美しさに通じるものがあることはよく知られる。

あの宗達下絵の光悦の歌巻が展示された時それを追って見る自分の耳に、ヴィヴァルディの「四季」が仰かしく響いたのを想い起す。けだし、この日本美術のラテン的性格は、海と太陽の賜物か

も知れぬ。

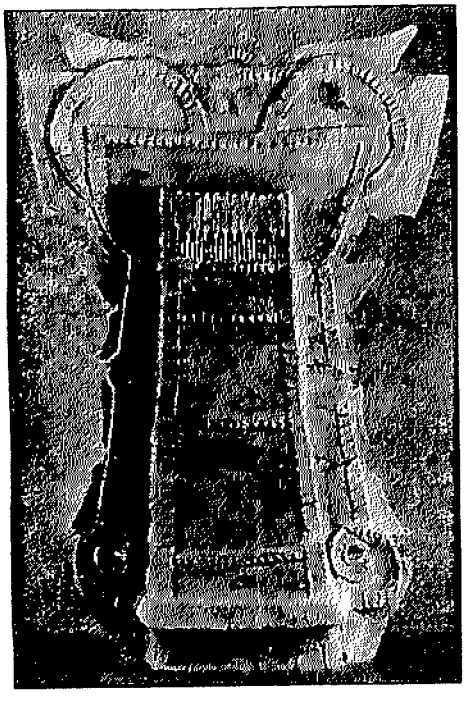
（五）

近畿の埴輪は、その出土した数に於いて関東のそれに劣るが、関東の埴輪で、近畿、就中奈良県出土の埴輪に質に於て優るものは、一点もないといっても過言ではない。

関東の埴輪は確かに面白く、愛すべきもので、民俗的資料としては優れているかも知れぬ。しかしそれらは総じて、表面的・形式的であり、冷やかな弱い肌合いをもっていて、大和の埴輪の大らかな明るい、彫塑的な密度のある本格的なものは少ない。この大和の埴輪が、前述の橿原土偶の造型感覚から来ていることは明らかである。

従来、埴輪に対してなされた評価は、一つは、その素朴なプリミティヴィズムへの郷愁に似たもの、他の一つは、そこに殉死的な、権力への恭順の姿勢と卑屈な眼射しを見る、共に感傷的なものであり、埴輪そのものを直視しないものであった。

こゝで、奈良県出土の埴輪を中心に、関東埴輪との相異点などを、埴輪そのものゝ彫塑的な評価を通して見て行きたい。



(1) 靫（ゆぎ）

御所市室、宮山古墳出土

この古墳は、奈良盆地の南端に位置する全長 約240 mの盛期の前方後円墳で、後円部に竪穴式石室が二つあり、調査された一方の石室には、堂々たる長持形組合式石棺が置かれてあった。石室内の出土品も立派であるが、この古墳のすばらしさは、その石室を覆う封土上に、長方形に二重に形象埴輪が樹立していたことである。こゝに上げた靫形埴輪は高さ140cm をこえるもので、その他、楯形、甲冑形、草褶形、家形など大型の実にみごとな埴輪群が出土している。自分はこの内のいくつかを復原、修理したが、この埴輪群の力強い造型と迫力、かっちりとした焼上がりは、日本一といってよいものである。関東の埴輪が赤味を帯びた植木鉢のような焼きであるのに対し、言いようのないほのかな朱色を含んだ美しい肌合いで、焼物の土でこれ以上の美しいものはない。これを復原した時の手にした埴輪断片の暖かさと重量感は忘れられないものである。

この靫の矢を入れてある長方形の部分には四区画に直弧文が線彫りされている。上から三段目は左半分が失われているが、自分はそれが、すぐその上の区画の直弧文の裏返されたものであることに気付き彫り込んでおいた。

この美しい直弧文については不明なこと多く、詳述できないが、直線と曲線という基本的な線の組合せでこれ程不思議な美しさをもつものはなく、古代ギリシアの文様でも、これに優るものはない。しかもこれが、レリーフ状の文様から出ていることは誠に興味あるものである。こゝでは、そ

の良き例を上げるにとどめる。

o奈良県御所市塚山古墳出土、剣の鹿角装具の浮彫（奈良県考古博物館）

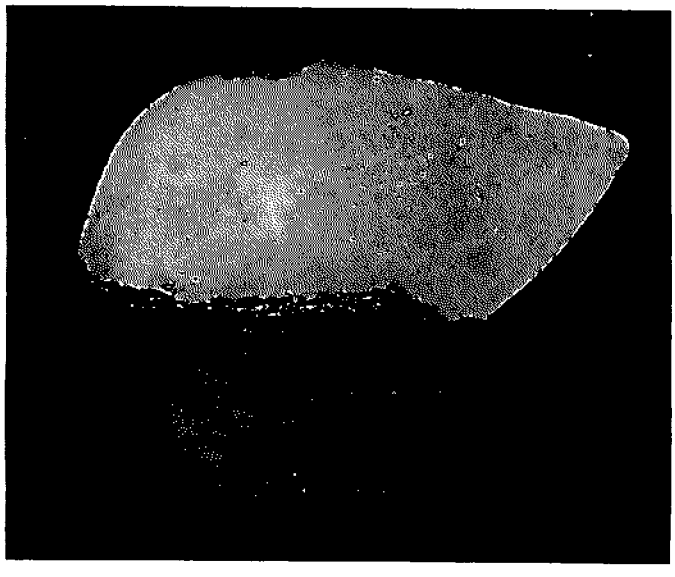
o奈良県広陵町新山古墳出土の鏡（宮内庁）

o岡山県高松町千足古墳石障の浮彫

古墳内部、石棺に用いられた例は他にいくつかあるが、これが最も密度の高い優れたものである。

o静岡県堂山古墳出土の鞆形埴輪の全面に線刻されたもの（磐田郷土館）

これは近畿的な埴輪の最も東寄りのもので、立派なものである。



(2) 衝角式冑

御所市鑵子塚古墳出土

埴輪の起源が日本書紀に云う野見宿禰の建策によるものでないことは、人物埴輪が、円筒埴輪や、これらの器財埴輪に続いて後に造られるようになったことからも明らかである。奈良県桜井市の茶臼山古墳は前方後円墳の初期のものであるが、その竪穴式石室上を方形に囲むように置かれた土師器の壺は、その起源をにおわせるものである。自分もその一つを復原したが、底部に径6cm位の孔があけられてあった。これは、明らかに葬儀器として祭られたもので、後に葬祭を誇示するために、朝顔形円筒、器財埴輪を生み、やがて人物が登場するが、それもその葬祭の中心となったであろう巫女が作られたのであった。

さて、この冑であるが、これは実に驚歎すべきものである。この良さはなかなか理解されないようだが、自分は武具埴輪の中では随一のものと思っている。これと並べて見られるものは、堺市いたすけ古墳出土の冑の埴輪だけである。全体の形の良さもであるが、丸味を帯びた部分の輝かしさは言葉で表現できないものである。強靭な迫力を秘めながら、あくまでおだやかで明るく暖かい。これこそ大和の埴輪の格調の高さを示すものである。

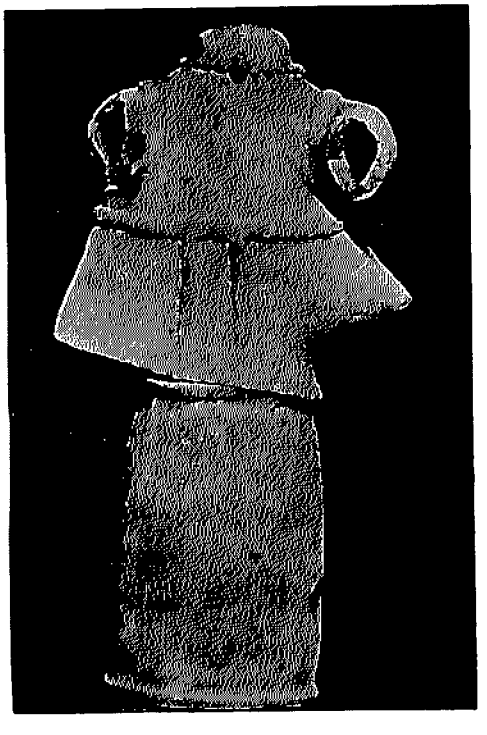
(3) 女子頭部

田原本町鍵出土

これは巫女と思われる高さ10cm程の小さな顔であるが、日本中の数ある埴輪の中で、これほど美しい頭部はない。自分はこの埴輪を方々から、様々の光線のもとで写したが、それらが実に変化のある表情を示したのに驚いた。しかしこの埴輪の美しさは、単に表情の豊かさだけでなく、その彫塑的な立体感にこそある。これは近畿の埴輪に共通したものだが、この頭部は、顔の巾よりも奥

行きの方が大きい位である。そのあふれるばかりの量感は、東日本の埴輪には見ることは出来ない。東日本の人物埴輪の頭部は、総じて、円筒へお面をはりつけたような造りで、ひどいのはたゞ、あごと顔のりんかくだけ肉付けしたと思われるようなものすらある。そこに見られる目鼻口の表情は何ら彫塑の本質的なものではない。この本質的な造型力のちがいに、焼上がりの肌合いの差がある。奈良県出土のものは大和の明るく暖かい、芳しい土の香りがある。これは、宗達、光悦らの大らかで豊潤な感覚であり、東日本のそれは浮世絵的な形式的で浅薄な、更に云えば華やかさに化粧されたひ弱な体質である。

他に良き頭部を上げるなら、天理市櫟本出土のものと、仁徳陵出土と伝えるもの二点である。

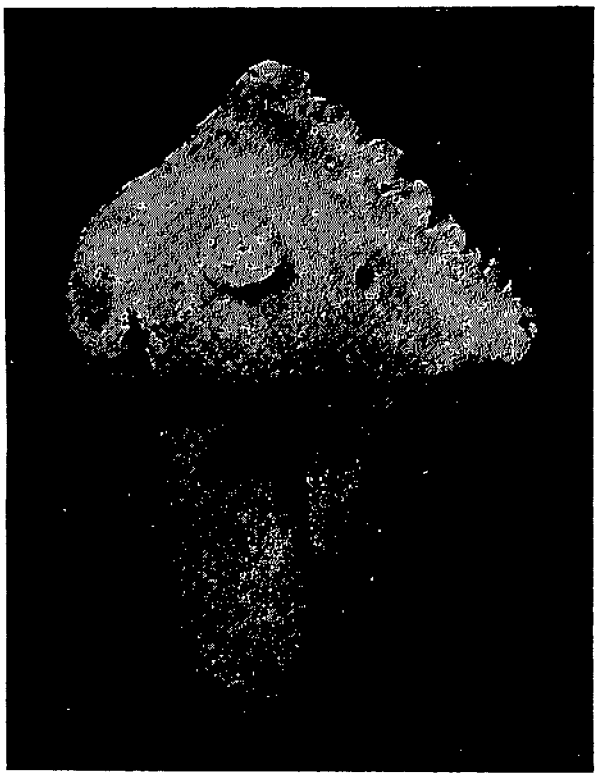


(4) 袈裟衣の女
河合村佐味田出土

この埴輪は、有名な家屋文鏡を出土した宝塚（黄金塚）古墳のすぐ北西から出土したもので、奈良県下で出土した同類のものの中で随一のものである。

衣は向って右で袋状になり左側は二枚の板状に離れている。たすきは奥行の深い丸味のある背中で×状に組まれる。腕はその背中からグッと強い形で太く作り出されている。

すっきりと立った端正な姿、豊かな量感、まことに格調の高い埴輪で、さぞかしすばらしい頭部がついていたことゝ思われる。



(5) 雞　頭

御所市領家山古墳出土

雞埴輪は早くから作られ、各地からの出土も多く、栃木県雞塚古墳出土のものはよく知られ、写実的なものであるがそれだけのものである。

西日本からは岡山市金蔵山古墳のものなどが知られるが、静岡の前掲の「鞆」埴輪と同古墳から出土した雞頭はなかなか堂々たるものである。「鞆」と同様、多少量感にだぶつきが見られる野暮ったい雰囲気をもつが、西日本的な明るい大らかさが感じられる。

しかし、多くの雞埴輪の中で、この御所市出土のものは、正に王者の風格を具えている。垂直に立上がった首とその頭部の造型は簡潔明快であの生きる雞の不断に動く柔軟な首から、このような堂々たる構築的な造型を生む感覚に驚くばかりである。

この首から想像する胴部はどんなものだったろうか。大阪市瓜破から胴部が出ているが、これでは、この首に対して弱く、小作りである。恐らく、前掲の鐙子塚出土の冑の如き力強いものであったに違いない。この胴部が見られないのは残念でならない。

自分は、雌鳥の首と思われる８０cm位の埴輪を持っているが、これは(1)に掲げた室の宮山古墳出土のものにちがいない（これを手に入れた当時、自分はまだ鎌倉の近くに住んでいて休み毎に奈良へ出て来ていた。これは、その古墳のすぐすそに住んでいて、今、橿原神宮の前で骨とう屋をしている古老が、昔自分で見つけたものという。その焼上がりの肌合いから云っても同古墳のものに間違いない。それを苦労して買求めた時、その雛と思われる首もあったが買えず、翌年、出かけて行った時には、奈良市在住の某氏の手に渡っていた。今は最初にこの埴輪を見つけた時写した写真から偲ぶだけである）。

これも真直ぐに首を上げている。関東出土の水鳥で首をくねらせたものがあるが、そんな小手先の表面的なものは近畿の埴輪にはない。総じて真直くに首を上げている。それらは愛らしいなどと云うものではない。光悦の「不二」の胴部は、アイガーの北壁を思わせるが、このように厳しく、壮大なものである。しかも明るく暖かい。

この首を見ていると、まこと、古代大和人の「明き直き心」と温かく芳わしい土の香がにおうばかりである。

(6) その他の動物埴輪

奈良県からは、他に、牛の埴輪が田原本町から出ている（千葉県からも出土しているが）、これ

は、かっちりとした彫塑的な作りで立派である。

馬の他、近年、鹿の埴輪が田原本町石見遺跡から出土した。鹿埴輪は他にもいくつか知られ、鳥取県出土のものは斑点をもった面白いものである。この石見遺跡出土のものは、自分が復原したが、盛期をやゝ下った頃のもので、宮山古墳出土の埴輪に比べると薄い感じがするが、立体感のあるものである。奈良から鹿の埴輪が出たことはうれしいことである。

（六）

以上、奈良県出土の土偶、埴輪を中心に、日本美術の源泉について述べて来たが、拙い文よりも写真からその意図する所を読みとっていただきたい。それ以上に、実物をぜひ見ていただきたい。

こゝに掲げた橿原の土偶と埴輪の(1)(2)(3)(5)は、畝傍山のふもと橿原公苑の考古博物館に常時、展示されている。こゝには奈良県出土の貴重な考古学資料が豊富に収蔵され展示されて、県下の発掘調査に忙がしい橿原考古学研究所と表裏一体をなす重要な博物館である。

同館の旧主任小島貞三氏、現主任伊達宗泰氏には、いろいろご教示や、資料の提供をいただいた。ここに感謝の意を表する。

図版写真は

橿原土偶 1. 2. 3. 4. 5

埴輪 (2)、(3)、(5)は、筆者撮影のもの。

他は、

サントリー美術館「土偶と土面」展カタログ

至文堂・日本の美術・はには

講談社・世界美術

角川書店・世界美術全集　　によった。